

〔類聚名物考〕調度五〔菰簾〕こもすだれ

こもにてあみたるすだれ也、今も田舎の賤屋にはこの物あり

〔散木奔誦集〕夏二おなじ心をよめる一○左京大夫經忠の家にて蚊遣火をよめる

かやり火の煙になる、こもすだれ物むつかしき我こゝろかな

〔夫木和歌抄〕簾三十二六帖題玄のすだれ

正三位知家卿

へだつれどまばらにあめる玄のすだれ玄のぶ人めの身こそかくれね

〔枕草子〕五五月の御さうじのほど略○中あきのぶの朝臣いへあり、そこもやがて見んといひて車

よせておりぬ、中だち事をぎて馬のかたかきたるさうじ、あじろびやうぶみくりのすだれなど、ことさらにむかしの事をうつしいでたり、

〔枕草子春曙抄〕五實九里簾にや、其製可尋之、

〔倭訓栞〕前編三十みくり略○中倭名抄に、三稜草を訓せり、新撰字鏡には苜蓿をよめり、今伏見に

て、うきやがらといへり、歌にみくりなはとよめるは、繩なるべし、袖中抄に、遍照寺の母屋の御簾は、みくりのつると申物にて侍るは、此物なるにや、枕草紙に、みくりのすだれと見えたり、あ

ひば草ともいふ、

〔和爾雅〕五器用ナハスダレ〔莛〕同、草簾也、

〔和漢三才圖會〕三十二家飾具二莛音捷和名奈波須太禮

捷者草簾也、編草障戸者、今垂繩、名繩簾者是也、

〔雅筵醉狂集〕春ある人の下屋敷の茶屋にて、藤を讀侍る、

藤のはな茶屋の軒ばにか、りけり、繩オホウシ暖簾のごとく土がま

〔本朝世事談綺〕二器用管簾